

著名人21人の証言

やがんと生きる やがんに生きる

家族が、友人が、知人が、そして自分が……3人に1人が、がんになる時代と言われている。がんはもはや他人事ではない。がんになったとき、人は何を悩み、悲しみ、何に救われ、奮い立ち、生きていくのか。「先輩」たちに話をうかがった。(福原麻希／本誌・大貫聰子)



小橋建太(40)

がんは自分の人生において何が大切なか、をつきつけてくる病もある。

小橋建太さんが腎臓のがんと診断されたのは昨年6月。定期検診のエコー検査で腫瘍が見つかった。

きわめて悪性の疑いが強い。手術で腎臓を一つ摘出したほうがいい、と勧められた。

すぐ頭に浮かんだのが、「腎臓一つの体で、またプロレスの世界に戻れるのか」ということだった。

腎臓には体中から血液が流れ込み老廃物をこしとる役割がある。打撲やけがにより大量の老廃物が出てくるため、プロレスラーは一般人よりも腎臓にかける負担がはるかに大きい。

数人の専門医にアドバイスを求めたが、「復帰なんて無理だ。第一、

腎臓をとつてもリングに戻る

前例がないからできるのかどうかもわからない」という。

悩んだ末、手術を受けようとしたのは主治医の一言だった。

「プロレスをやりたい気持ちはわかります。でも、ま

ず生きましょう。命があつたら何でもできますよ」

しかし、腎機能の目安となるクレアチニンの値は手術後、正常値の100倍を超えた。老廃物が詰まり、腎不全に陥る可能性もある

考えれば考へるほど落ち込んでいった。

医師から「軽い運動なら」と許しが出たのは、手術から約2カ月後のことだ。

「まず、リングに上がって大の字に寝ました。やつぱりここはいいなあとしみじみ感じましたね」

しかし、一つしかない腎臓に負担はかけられない。手術で120キロから15キロ近く落ちた体重を戻すため、タンパク質をとりたくても、腎臓の負担になるため思うように摂取できない。腎臓と相談しながらのトレーニングだ。

なぜそこまでプロレスにこだわるのか。

「僕はこれまでプロレスに命をかけてきた。そのこと



1967年生まれ。プロレスラー。
06年に腎臓がんと診断され、右腎臓を摘出した。

その後、数値も落ち着きた。退院できたが、今度は猛烈な倦怠感が襲ってきた。動くことすらできない。朝起きてソファに座り、日が暮れるのを待つだけの毎日。「このままどうなっていくんだろう」

いるが、再発すると「こんちくしょう」って聞わなくてはいけない。でも、俺も痛いし、副作用は苦しい。今後もがんと闘うか、何もせず共生するか、まだ気持ちは揺れています」

吉本興業勤務時代は筑波大学・村上和雄名誉教授の「笑いが2型糖尿病患者の食後血糖値上昇を抑える」という研究に協力した。「笑いが免疫力を向上させる」という複数の医学研究もあ

る。横澤さんもときどき、将来が有望な若手の落語や寄席に行つて、心の中のモヤモヤを吹き飛ばしてくるそうだ。

「うつや脳卒中などで心身にダメージを受けると、顔が硬直して能面のようになります。そんなとき笑いは、凝り固まつたり、せっぱつまつたりした状況にフツと風穴を開けていく。それが精神的なリラックスにつながるんです」

（笑い）
「だつて元氣だつたし、5月の末に再検査するまで、がんのことは忘れてたわ

（笑い）
「ただ、すぐ頭に浮かんだのは夫・龍太郎さんのことだつた。

「主人だつたらきっと、セカンドオピニオンを受けるよう言つたんじやないか」

その後、国立がんセンターで受診し、手術を受けることとした。

「主人はがんになつた友達に病院を紹介したり、相談に乗つていて、よくそんなことを言つていたものですから」

その後、医師から「初期の乳がんで、しこりになるタイプではなく転移しやすい浸潤性」と診断され、全摘出することを決めた。

久美子さんは自身は、がん

初期の乳がんと診断され、東京都中央区築地にある国立がんセンターで左乳房の全摘出手術を受けた。

「左胸があやしい。がんか人間ドックで、

1941年生まれ。故・橋本龍太郎元首相の妻。07年、乳がんで乳房全摘出手術を受けた。2男3女の母



橋本久美子(65)

「もし主人がいたら、何て言つてたかしら。子供の具合が悪くなると大騒ぎする人だつたから」

昨年7月に亡くなつた橋本龍太郎元首相の妻、久美子さんは笑う。

久美子さんは今年7月、初期の乳がんと診断され、東京都中央区築地にある国立がんセンターで左乳房の全摘出手術を受けた。

2月に2年ぶりに受けた

「左胸があやしい。がんか

もしないので、3ヵ月後にまた検査しましよう」と言われたが、最初は病になつてしまつて」と話していたら、子供たちに「ママ、手術が終わつてから言いまさい」って注意されるくらい、あつけらかんとしてたんです」

（笑い）
「だつて元氣だつたし、5月の末に再検査するまで、がんのことは忘れてたわ

（笑い）
「ただ、すぐ頭に浮かんだのは夫・龍太郎さんのことだつた。

「主人だつたらきっと、セカンドオピニオンを受けるよう言つたんじやないか」

その後、国立がんセンターで受診し、手術を受けることとした。

「主人はがんになつた友達に病院を紹介したり、相談に乗つていて、よくそんなことを言つていたものですから」

その後、医師から「初期の乳がんで、しこりになる

タイプではなく転移しやす

い浸潤性」と診断され、全

摘出することを決めた。

久美子さんは自身は、がん

になつたことについてあま

りショックを受けなかつた

年1月に左肺を、8月には

という。

「会う人会う人に『乳がんになつてしまつて』と話して、子供たちに『ママ、手術が終わつてから言いまさい』って注意されるくらい、あつけらかんとしてたんです」

（笑い）
「だつて元氣だつたし、5月の末に再検査するまで、がんのことは忘れてたわ

（笑い）
「ただ、すぐ頭に浮かんだのは夫・龍太郎さんのことだつた。

「主人だつたらきっと、セカンドオピニオンを受けるよう言つたんじやないか」

その後、国立がんセンターで受診し、手術を受けることとした。

「主人はがんになつた友達に病院を紹介したり、相談に乗つていて、よくそんなことを言つていたものですから」

その後、医師から「初期の乳がんで、しこりになる

タイプではなく転移しやす

い浸潤性」と診断され、全

摘出することを決めた。

久美子さんは自身は、がん

になつたことについてあま

りショックを受けなかつた

年1月に左肺を、8月には

つた」という。

手術後の感想は、

「麻酔から覚めたら、胸の上に止血のための板のようなものがついていて、重い

手術のような感じでしたよ」

（笑い）
「だつて元氣だつたし、5月の末に再検査するまで、がんのことは忘れてたわ

（笑い）
「ただ、すぐ頭に浮かんだのは夫・龍太郎さんのことだつた。

「主人だつたらきっと、セカンドオピニオンを受けるよう言つたんじやないか」

その後、国立がんセンターで受診し、手術を受けることとした。

「主人はがんになつた友達に病院を紹介したり、相談に乗つていて、よくそんなことを言つていたものですから」

その後、医師から「初期の乳がんで、しこりになる

タイプではなく転移しやす

い浸潤性」と診断され、全

摘出することを決めた。

久美子さんは自身は、がん

になつたことについてあま

りショックを受けなかつた

年1月に左肺を、8月には

（笑い）
「だつて元氣だつたし、5月の末に再検査するまで、がんのことは忘れてたわ

（笑い）
「ただ、すぐ頭に浮かんだのは夫・龍太郎さんのことだつた。

「主人だつたらきっと、セカンドオピニオンを受けるよう言つたんじやないか」

その後、国立がんセンターで受診し、手術を受けることとした。

右肺の手術を受けた。

「転移と聞いて、奥さんや娘はショックを受けていましたが、僕はあまりなかつたなあ」

1回目の手術が終わってすぐに、CT検査で肺に影があることは指摘された。

「突然言われたわけではなく、ずっと話はあったので『もしがんだつたら、そればいいや』と思っていた」

手術の翌週にはテレビの仕事へ復帰。

「僕は仕事が好きなんで、じつとしてられないんですよ。まあ、死に急いでいるのかもしれません」と笑う。

大腸がんの手術の際には、検査から手術後まで、信頼しているディレクターに頼んでカメラを回してもらつた。

「とりあえず記録しようと思つたんです。仕事柄、何でもメモするというのが習慣になつてますからね。それに他人の不幸、悲しみ、苦しみに踏み込んで取材し

ておいて、自分のときは勘弁してくれというわけにはいかないでしょう」

「いずれ放送して、がんになつている人やその家族に何かメッセージを残したい」という思いもあった。

「30代、40代だつたらもつとジタバタしたかも知れない。でも僕はある程度仕事もしたし、経験もしたしね」

また鳥越さんががんになつて強く感じたのは、お金の問題だ。

がんになって手術や治療を受けると何百万、何十万円というお金がかかる。

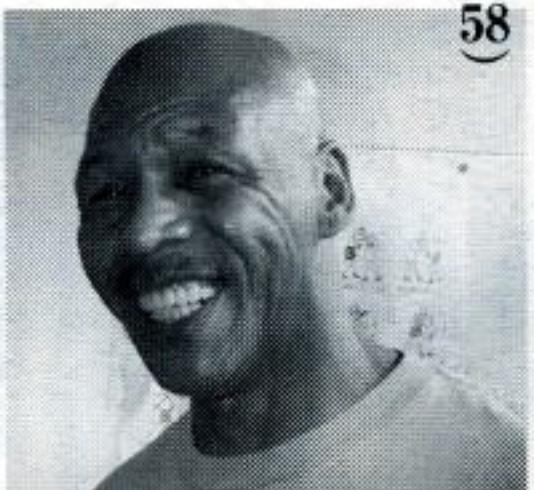
「退院して請求書を見たら、すごい金額で驚いた。奥さ

んに『がん保険入っているの?』と聞いたら、入つて

カシアス内藤さんは、大きなバッグを肩にかけ、さ

抗がん剤にはKOされたよ

(58)



「僕はエディさんと二つの約束をした。一つはチャンピオンになること。これはもう一つはボクシングジムを開くことだつたんだ」

手術はせず、放射線や抗がん剤で治療しながら夢をかなえようと決心した。

しかし「抗がん剤には何度もKOされたよ」という。

吐くものがなくなつてもこ

み上げてくる吐き気。

「あのつらさは経験したものしかわからないよ」

退院後の05年、念願のボクシングジムを開いた。エ

ディさんとカシアスさんの本名、純一の頭文字をとつて、「E&Jカシアス・ボク

あつたが、

「依頼があつたとき一度断つたんです。でも僕自身、がん保険に入つていたことでとても助かった。僕はこれまで自分の信じることをやつてきた。だから出ようとしたんです」

ニッと笑つた。

「終末期は別だろうけど、がんは悪いところをとればふつうの生活が送れる。転移、再発はウォッチしつつ、これまでどおり仕事をしていきますよ」

ところが4年後、突然カムバックを果たす。名トレーナーといわれたエディ・タウンゼントさんのもとで東洋・太平洋ミドル級王座に挑戦したが、あと一步というところで敗退した。その後はフィットネスジムのインストラクターや配管工などボクシングから離れていた。

カシアス内藤さんは、大月に咽頭がんと診断された。シヨツクだったのはがんになつたことよりも、舌の付け根にあるがんゆえ、手術をすれば声が出なくなる、と言わされたことだつたといふ。

カシアスさんは68年にプロデビュー。以来、破竹の勢いで東洋チャンピオンにまでのぼりつめた。しかし初防衛戦で失敗し、74年に引退。

という。

シングジム」と名付けた。
「この病気に背中を押されたような気がする」とカシアスさんはいう。

これまで「いつかきっと」が座右の銘だった。でも、がんになつて、自分のボクシングには「今やらなきゃ」がなかつたと気づかされたという。

今も毎日飲む抗がん剤に

よるだるさは続いている。
「そういうときは横になつているしかないよね」

しかしあシスさんは体

調のいい日は、ほぼ毎日ジムに来る。

「手術して5年生きていれば完治。だったら5年共存するのも勝ちでしょ。僕はドローに持つていけばいい、と思ってるんだよね」

「いまはお薬を飲んでこうなつちやつたけど、お病気治つたら、ちゃんと、また髪の毛生えてくるよ」

家族のだれかが入院すると、幼い子供でも家の中の緊張を敏感に察する。そのとき、心配させまいとして

「あなたは何も知らなくていいのよ」と情報を遮断すると、子供はかえつて大きな不安に陥ってしまう。

仁科さん自身、つらい立場だったが、二人の年齢に合った表現で説明し、さらに、寂しいと思わないよう、病室から携帯電話で朝昼夜と電話していたそうだ。

それでも、ある日、克基さんが学校にいるはずの昼間、突然、病院に電話してきたことがあつた。切羽詰まつた声でこう聞いたといふ。

「ちやーちゃん、がんなの。

お友達がそう言うんだ。死んじやうの」

仁科さんは心ない周囲の

会話によつて、胸を痛めた息子の気持ちにショックを受けて答えたそうだ。

「うん、そう。がんというお病気だけど、退院したら正樹（本名）と仁美のところに戻るからね」

「わかった。待つてるね」

当時、仁科さんが4カ月入院していたように、がんは長期戦になる場合も多く、患者本人だけでなく、家族も闘病生活に巻き込まれる。

このため、近年、「家族の心のケア」についても注目されるようになってきた。

「病人は心がデリケートになつていて、感情の起伏が激しい。わがままなもので

するものがとても嬉しかつた。『手当て』という言葉どおり、病院のベッドの中で、その温もりと心のやすらぎを感じました」

仁科亞季子（54）
仁科亞季子さんが子宮頸がんと診断されたのは38歳のとき。長男の克基さん（俳優）は8歳、長女の仁美さん（タレント）は6歳だった。入院前、仁科さんは克基さんとこんなやりとりを交わしたと言う。

「ちやーちゃん（当時、子供たちは仁科さんのことをおこう呼んでいた）は、おなかの中に悪い虫さんが入っちゃつたから、ちょっと退治してくるね」
「うん、わかった。がんば



1953年生まれ。女優。91年に子宮頸がんと診断され、抗がん剤治療、子宮・卵巢・骨盤内のリンパ節などを切除、さらに放射線治療を受けた

嬉しかつた家族の「手当て」

本当の闘いは手術後だつた

山田邦子（47）

1960年生まれ。タレント。07年、乳がんと診断され、右と左の乳房から三つの腫瘍を摘出する手術を受けた

つて聞つてきてね」

術前の抗がん剤治療で仁科さんの髪の毛が抜けてしまつて、克基さんから、

「なんだか、ちやーちゃん、

仁科さんは心ない周囲の



手術や放射線治療は終わ

り、今は一日一回ホルモン剤を飲みながら仕事をする

毎日。

「でも告知を受けたときより、手術のときより、今のほうが不安。とうとう自分とがんの闘いが始まったという気がする」

と山田邦子さんは言う。

「今年3月に乳がんと告知され、ワーッと手術の段取りが決まって。変な話、自分がんのはずなのに病院の先生ばかりが頑張つて。他人事のようだつたあとと思う。立ち向かわなきや、と神経もはりつめてたし」

自己診断で右胸のしこりを見つけた山田さんが、病院の検査では右に二つ、左にも一つがんが見つかつた。

ごく初期だったため、乳房を温存し、がんを摘出する手術を受けた。

「でも、手術が終わってみると、終わつてからのはうがつらかった」

手術後、7月から8月にかけて毎日病院に通い、放

射線治療を受けた。治療を続けていくうち、

「あんまり心配かけたくない

赤にただれてしまった。今まで身につけていた下着が痛くてつけられない。さらに、ずっと熱があるようだ

るが続いた。

「それに、放射線を胸に当

てることで、肺がんのリスクが高まることがあるって

聞いたから、ちょっと咳が出ただけで肺がんになつた

つた。一度がんができたこ

とで『私はがんができる体質なんだ』と視野が狭くなつていたんですね

その不安は放射線治療が終わつた今も変わらない。

そんなとき、山田さんは

同じ乳がんの先輩に会つて

話をすると、

「ちょうど私の5年先輩といふ人がいるの。ラッキーでしょ（笑い）」

何か不安に思つたとき、

その人に相談し、

「私もそうだつたのよ！」

という言葉を聞くだけで気持ちが楽になるという。

精神科に通つて話を聞いてもらうこともある。

医師の診断は、早期の乳

がんの手術を受けた人用の下着があるんだけど、今は勝負下着つていえるぐらいのまないし、3人も子供を産んでいる。ローリスクだと思っていていたのね」

今年10月、乳がんの摘出手術を受けたアグネス・チャンさんは言う。

自宅で寝転がつてテレビを見ていたとき、右胸にチクッとしきびができるよ

うな痛みが走つた。

さわつてみるとゴムでで

きたビーズのようなものがつらかった

あった。

「もしかして……」

翌々日、都内の病院で検

査を受けた。

医師の診断は、早期の乳

がん。腫瘍は小さいが粘液

系といつて転移する可能性もあるという。

「やっぱり」と思うと同時に、もしかしたら死んじやうんじゃないかという不安が襲ってきた。

医師や家族と相談し、乳

がんの手術を受けた人用の下着があるんだけど、今は勝負下着つていえるぐらいのまないし、3人も子供を産んでいる。ローリスクだと思っていていたのね」

いま飲んでるホルモン剤はこの先、5年間飲み続けることになる。

「長いおつきあいになるわけでしょ。だから、お酒も飲みますよ。下着もね、乳

がんの手術を受けた人用の下着があるんだけど、今は勝負下着つていえるぐらいのまないし、3人も子供を産んでいる。ローリスクだと思っていていたのね」

いま飲んでるホルモン剤はこの先、5年間飲み続けることになる。

「でも実際受けてみたら、胸がどうなつているのか見たくなかつた」

医師に「第一歩は鏡を見ること」と言われ、おそるおそる手術痕を見た。

傷のまわりには痛々しい血のあとが残つていた。

「乳がんは体よりも心のダメージが大きいといわれる意味がよくわかりました。手術跡が痛くてブラジャーもできないし、人に会いたくなかった」

まず外に出る練習をしようと手術後、お洒落をして家族3人でおすしを食べに行つた。

「そのときからかな。だんだんふつきてきたのは」

今は仕事をしながら、放

射線治療を受けるため、毎日、病院に通つて

房を温存する方向で摘出手術を受けた。

手術前は、胸に特別、執

着はないと思っていた。再

発のリスクが低くなるなら、乳房を全摘出することも考

えたという。

「でも実際受けてみたら、胸がどうなつているのか見たくなかつた」

医師に「第一歩は鏡を見ること」と言われ、おそる

おそる手術痕を見た。

傷のまわりには痛々しい

血のあとが残つていた。

「乳がんは体よりも心のダメージが大きいといわれる意味がよくわかりました。手術跡が痛くてブラジャーもできないし、人に会いたくなかった」

まず外に出る練習をしようと手術後、お洒落をして家族3人でおすしを食べに行つた。

「そのときからかな。だんだんふつきてきたのは」

今は仕事をしながら、放

射線治療を受けるため、毎日、病院に通つて

房を温存する方向で摘出手術を受けた。

手術前は、胸に特別、執

着はないと思っていた。再

発のリスクが低くなるなら、乳房を全摘出することも考

えたという。

「でも実際受けてみたら、胸がどうなつているのか見たくなかつた」

医師に「第一歩は鏡を見ること」とと言われ、おそる

おそる手術痕を見た。

傷のまわりには痛々しい

血のあとが残つていた。

「乳がんは体よりも心のダメージが大きいといわれる意味がよくわかりました。手術跡が痛くてブラジャーもできないし、人に会いたくなかった」

まず外に出る練習をしようと手術後、お洒落をして家族3人でおすしを食べに行つた。

「そのときからかな。だんだんふつきてきたのは」

今は仕事をしながら、放

射線治療を受けるため、毎日、病院に通つて

房を温存する方向で摘出手術を受けた。

手術前は、胸に特別、執

着はないと思っていた。再

発のリスクが低くなるなら、乳房を全摘出することも考

えたという。

「でも実際受けてみたら、胸がどうなつているのか見たくなかつた」

医師に「第一歩は鏡を見ること」とと言われ、おそる

おそる手術痕を見た。

傷のまわりには痛々しい

血のあとが残つていた。

「乳がんは体よりも心のダメージが大きいといわれる意味がよくわかりました。手術跡が痛くてブラジャーもできないし、人に会いたくなかった」

まず外に出る練習をしようと手術後、お洒落をして家族3人でおすしを食べに行つた。

「そのときからかな。だんだんふつきてきたのは」

今は仕事をしながら、放

射線治療を受けるため、毎日、病院に通つて

房を温存する方向で摘出手術を受けた。

手術前は、胸に特別、執

着はないと思っていた。再

発のリスクが低くなるなら、乳房を全摘出することも考

えたという。

「でも実際受けてみたら、胸がどうなつているのか見たくなかつた」

医師に「第一歩は鏡を見ること」とと言われ、おそる

おそる手術痕を見た。

傷のまわりには痛々しい

血のあとが残つていた。

「乳がんは体よりも心のダメージが大きいといわれる意味がよくわかりました。手術跡が痛くてブラジャーもできないし、人に会いたくなかった」

まず外に出る練習をしようと手術後、お洒落をして家族3人でおすしを食べに行つた。

「そのときからかな。だんだんふつきてきたのは」

今は仕事をしながら、放

射線治療を受けるため、毎日、病院に通つて

房を温存する方向で摘出手術を受けた。

手術前は、胸に特別、執

着はないと思っていた。再

発のリスクが低くなるなら、乳房を全摘出することも考

えたという。

「でも実際受けてみたら、胸がどうなつているのか見たくなかつた」

医師に「第一歩は鏡を見ること」とと言われ、おそる

おそる手術痕を見た。

傷のまわりには痛々しい

血のあとが残つていた。

「乳がんは体よりも心のダメージが大きいといわれる意味がよくわかりました。手術跡が痛くてブラジャーもできないし、人に会いたくなかった」

まず外に出る練習をしようと手術後、お洒落をして家族3人でおすしを食べに行つた。

「そのときからかな。だんだんふつきてきたのは」

今は仕事をしながら、放

射線治療を受けるため、毎日、病院に通つて

房を温存する方向で摘出手術を受けた。

手術前は、胸に特別、執

着はないと思っていた。再

発のリスクが低くなるなら、乳房を全摘出することも考

えたという。

「でも実際受けてみたら、胸がどうなつているのか見たくなかつた」

医師に「第一歩は鏡を見ること」とと言われ、おそる

おそる手術痕を見た。

傷のまわりには痛々しい

血のあとが残つていた。

「乳がんは体よりも心のダメージが大きいといわれる意味がよくわかりました。手術跡が痛くてブラジャーもできないし、人に会いたくなかった」

まず外に出る練習をしようと手術後、お洒落をして家族3人でおすしを食べに行つた。

「そのときからかな。だんだんふつきてきたのは」

今は仕事をしながら、放

射線治療を受けるため、毎日、病院に通つて

房を温存する方向で摘出手術を受けた。

手術前は、胸に特別、執

着はないと思っていた。再

発のリスクが低くなるなら、乳房を全摘出することも考

えたという。

「でも実際受けてみたら、胸がどうなつているのか見たくなかつた」

医師に「第一歩は鏡を見ること」とと言われ、おそる

おそる手術痕を見た。

傷のまわりには痛々しい

血のあとが残つていた。

「乳がんは体よりも心のダメージが大きいといわれる意味がよくわかりました。手術跡が痛くてブラジャーもできないし、人に会いたくなかった」

アグネスさんは昨年12月にも、あごの裏にある唾液腺に腫瘍ができ、摘出手術を受けている。幸い腫瘍は良性だったが、顔に麻痺が残る可能性もある難しい手術だった。

「やっぱり50年も使つていれば、健康だとしてもガタがくるんですね。わたしもそうだけど、今の50代って元気だから、いつまで

も若いつもりでいて、体が出る小さいサインを見逃しがちになる」

特に家庭をもつ女性は自

分の健康をあとまわしにしがちだ。

「わたしも41歳で子供を産んでから検診を受けてなかつた」

これからも定期的に点検、修理しながらつきあっていこうと考えている。

今のほうが「生きている」

高木禎彦(45)

がんというふるいにかけ残つたもの。それが家族だつた」。

高木禎彦さんは02年、胃



1962年生まれ。タレント。83年、チエックサイトのサイドボーカルとしてデビュー。02年、胃がんと診断され、胃、脾臓、胆嚢、食道の一部を摘出する手術を受けた

と振り返る。

昔は仕事、仕事で、考えるのは自分のことばかりだったから

80年代から90年代、チエックサイトは若い世代を中心に行つてもファンの歓声が聞こえた。

解散し、一人のタレントとして歩き出した矢先のがんだった。

「死んでしまうのか?」夜、布団に入ると「このまま明日の朝になつても目を覚まさないんじやないか」という考えが浮かんで眠れなかつた。

そんなとき心の支えになつたのが、妻・恭子さんや3人の子供たちの存在だつた。

「パパががんって言われたとき、一緒に死のうと思つたのよ」

あるとき、恭子さんがぽつんと言つた言葉に胸を打たれた。

「こんなに俺を思つていてくれたのか。俺は一人じゃないんだな」

しかし、つらいことも多かった。6ヶ月に1度の検診のたびにわき上がる「再発しているんじゃないかな」

という恐怖。胃を切除してしまつたために、時折、低血糖状態になり、脂汗や震えが襲う。

しかし、「今のほうが生きている」という実感がある。充実している」という。

朝、目が覚めたときに、同じ場所で目を覚ますことができるので喜び。子供のことで夫婦で悩んだりするのも楽しい、という。

生活も一変した。

手術中に「ナイスショット!」

関口照生(69)

胃がんの診断を受けるまで、関口照生さんは写真家仲間と酒を酌み交わすたびに、

「自分の好きなことをしてきたんだから、いつ命が終わつてもいいんじゃない」と言い合つたという。が、

いざ、命のリミットを目の前に宣告されてみると、「そんなんにかっこいいもんじゃなかつた」そうだ。

「肺がんになつた友人がいたことがあります。『どうやつたら、あと何年生きられるんだ』とつぶやいていたことがありました。



1938年生まれ。写真家。妻は女性の竹下景子。01年、胃がんと診断され、翌年、胃の切除手術を受けた

「今はよりも家族で過ごす時間が最優先。子供の運動会、学校の行事はすべて参加しますね」

今、長女は16歳。恭子さんが高木さんと出会つたのが20歳のときだ。

「あと数年で、俺みたいなと出会うわけですよ(笑い)。いつまで今みたいに家族で過ごせるかな」

そんな当たり前の時間を大切にしたいのだという。

生きるための緩和ケア

末期だけのものではない

がんによる痛みを取り除く治療や心のケアなどを行う緩和ケアは、死を覚悟した人だけのものではないことをご存じだろうか。

検診でごく早期のがんを偶然発見する場合もあるが、不快な症状や体調が悪いと感じて、医療機関を受診する人も少なくない。

「がんと初めて診断された時点で、がん性疼痛（痛み）を伴い、緩和ケアの柱でもあるモルヒネなどの医療用麻薬を使った治療が必要な患者さんが約2割と言われています。痛みは末期だけにあらわれる症状ではない。がんを治す治療と緩和ケアは同時並行できるのです」

と、広島県緩和ケア支援センター長・本家好文医師

（58）は話す。
がんが治つても、痛みや苦痛に苛まれるのであれば、何のために生きているのか。患者は自問自答し苦しむこ

とになると嘆く。

今年4月に施行されたがん対策基本法に緩和ケアの重要性が盛り込まれ、整備が急ピッチで進む。

しかし、緩和ケアを専門とする医療従事者はまだまだ少ないのが現状だ。

医療用麻薬を使つた疼痛治療は、世界保健機関（WHO）が提示しており、確立した治療方法だが、日本

は欧米に比べて医療用麻薬の使用量が10分の1ほどにとどまっている。疼痛治療で麻薬中毒にはならないが、患者や医療従事者にもモルヒネに対する抵抗感があるのも一因だ。

がんに伴う苦痛はそのほか、心の問題、家族の負担など幅広い。こうした苦しみに向き合うのが緩和ケアであり、ひいてはがんとともに生きるためにの処方箋なのである。

（ライター・関百合子）

僕も死と直接向き合わざることを得なくなつたとき、「一瞬にしてすべてを失うのか」と思うと怖かった。子供の顔をもつと見てみたい、今的生活や好きな海や山を見続けたいと思いました」

告知を受けた翌日から数人の医師の友人に相談したら、そのほとんどは未分化癌だと聞いて手術を勧めた。本人も手当たり次第、資料を集めいろいろな治療法を勉強した。すると、未分化がんは転移が早い、手術をしなければ予後が悪いな

どがわかつてきました。「例え、今まで漠然と目の中に入っていたものでも、目を凝らしたいと思うようになります。子供の日常でも、とあいまいに物事を見ていくんです。子供の日常でも、じつと見ていると何を大事にしているかがわかつてくる。一瞬に重みを置くようになつたら、今までには目に入らなかつたものが見えるようになりました」

入院の手続きを促された関口さんは愕然としながらも、待てよ、と思ったという。告知を受けたその日に、

「医師に勧められるまま手術を受けるのではなく、自分も病氣について勉強して、納得のいく方法で治療を受けたい。その日はそのまま帰らせてもらいました」

その後の治療法選びでは、手術を受けず、がんとともに生きることも考えた。

「僕にとつての『社会復帰』は、旅をしながら元気よく

カメラのシャッターを切ること。術後、以前のように動けなくなつて、家でゴロゴロ暮らすぐらいなら手術はしない。あと10年生きらなければ、それでもういいと思つていました」

手術後、生きることを再獲得してからは、何でも真剣にやりたくなつたそうだ。〈例え、今まで漠然と目の中に入っていたものでも、目を凝らしたいと思うようになります。子供の日常でも、とあいまいに物事を見ていくんです。子供の日常でも、じつと見ていると何を大事にしているかがわかつてくる。一瞬に重みを置くようになつたら、今までには目に入らなかつたものが見えるようになりました〉

有名シェフ7人の味の秘訣教えます
週刊 シェフ7人の
おうちレシピ
■定価500円(税込) ■毎週火曜日発売
8号のテーマ:「シェフのまかない」
「残り野菜とひき肉の炒めもの」(陳建一)
「オイルサーディンのパスタ」(日高良実)など21品
朝日新聞社

「がんと生きる、がんに生きる」後半116ページに続く

奇跡の復活から8年で再発

盛田幸妃(37)

元近鉄バファローズの名ストッパーだった盛田幸妃さんは、いつも足首まで固定できるハイカットの靴を履いている。

盛田さんは現役の投手として活躍していた98年、脳腫瘍が見つかり手術を受けた。「少し前から右足のけいれんが起きるようになっていたんです。右だけスリップが脱げたり、右足だけ力が入らなくなっていた」

「しばらくは右半身全体が麻痺していて、ふつうの生活ができるのかもわからなかつた。思わず『殺してほしい』と口走ったこともあります」

「しゃらくは右半身全体が麻痺していて、ふつうの生活ができるのかもわからなかつた。思わず『殺してほしい』と口走ったこともあります」

「でも病気になつてはじめて野球に感動しましたよ。今までとは違う体でどう抑えるか考えて投げる。一球一球がもつたないと思つた。ああ、これまでには能力にまかせて投げていただけだつたんだなあつて」

01年にはオールスターでファン投票1位に選ばれ、カムバック賞も受賞した。

しかし、現役を引退し、解説者として仕事をしてい

医師の診断は良性の髄膜腫ということだった。しかし腫瘍は太い静脈が集まつた難しい場所にできてしまつた。手術は成功したが、右足首に麻痺が残つた。

「でも病気になつてはじめて野球に感動しましたよ。今までとは違う体でどう抑えるか考えて投げる。一球一球がもつたないと思つた。ああ、これまでには能力にまかせて投げていただけだつたんだなあつて」

翌年、右足首を装具で固定し、復帰した。しかし球速は10キロ以上おち、右足首も動かない。

「でも病気になつてはじめて野球に感動しましたよ。今までとは違う体でどう抑えるか考えて投げる。一球一球がもつたないと思つた。ああ、これまでには能力にまかせて投げていただけだつたんだなあつて」

翌年2月、2回目の摘出手術を受けた。髄膜腫はできるといくつもできることが多い。今後、悪性に変わつたり、麻痺が進む可能性もある。

「でも生きていれば不自由でもなんとかなるからね」

「奇跡」と言われた復帰をなしとげたからこそ言える言葉だ。

「僕は、手術をするのは医者でも、普段の生活で自分の健康をチェックする。『指示医』は自分だと思ってるからね」

初期のがんだつたため、おなかに複数の穴を開けて行う腹腔鏡下手術を受けることになつたが、なんと寺内さんは注射による脊髄麻酔を拒否したという。

「注射はイヤだ！」だったら手術は受けない、って言つてね（笑い）

すると、鼻から吸入するマスク麻酔に変更になつた。

「痛みだつて何だつて我慢する必要なんかないんだ。」

高校を巡るハイスクールコンサートは1300回を超えた。

「みんなこう言うんだよ、そんなにあげたら俺のがなくなつちまうだろ（笑い）」

そう軽口をたたく寺内さんは01年、初期の大腸がんと診断され、翌年、手術を受けた。

きっかけは、約20年前から受けているという人間ドックだつたんだなあつて」

「僕は、手術をするのは医者でも、普段の生活で自分の健康をチェックする。『指示医』は自分だと思ってるからね」

寺内タケン(68)

1969年生まれ。野球解説者。1990年、現在の横浜ベイスターズに入団。02年引退。98年、近鉄バファローズ(現オリックス・バファローズ)在籍中、脳腫瘍の手術を受けた。06年に脳腫瘍で2回目の手術を受けた。

1939年生まれ。ギタリスト。62年に寺内タケシとブルージーンズを結成。『エレキの神様』と呼ばれていた。02年に大腸がんで手術を受けた。

「それに球団(当時・近鉄バファローズ)が契約を更新してくれたことも大きか

った。嬉しかつたですね」翌年、右足首を装具で固定し、復帰した。しかし球速は10キロ以上おち、右足首も動かない。

「僕の場合、腫瘍が脳の静脈にくつづいているので、最初の手術でもとりきれていかなかつた。とうとうきたかなあとthoughtましたね」

昨年2月、2回目の摘出手術を受けた。髄膜腫はで

きるといくつもできること

が多い。今後、悪性に変わつたり、麻痺が進む可能性もある。

「でも生きていれば不自由でもなんとかなるからね」

「奇跡」と言われた復帰をなしとげたからこそ言える言葉だ。

「僕は、手術をするのは医者でも、普段の生活で自分の健康をチェックする。『指示医』は自分だと思ってるからね」

初期のがんだつたため、おなかに複数の穴を開けて行う腹腔鏡下手術を受けることになつたが、なんと寺内さんは注射による脊髄麻酔を拒否したという。

「注射はイヤだ！」だったら手術は受けない、って言つてね（笑い）

すると、鼻から吸入するマスク麻酔に変更になつた。

「痛みだつて何だつて我慢する必要なんかないんだ。」

コンサート後、寺内タケンさんの楽屋には高校生がこう言つてお礼に訪れる。

74年から始まつた全国の

た盛田さんを、05年10月、再びけいれんが襲う。

「僕の場合、腫瘍が脳の静脈にくつづいているので、最初の手術でもとりきれて

いかなかつた。とうとうきたかなあとthoughtましたね」

昨年2月、2回目の摘出手術を受けた。髄膜腫はで

きるといくつもできること

が多い。今後、悪性に変わつたり、麻痺が進む可能性もある。

「でも生きていれば不自由でもなんとかなるからね」

「奇跡」と言われた復帰をなしとげたからこそ言える言葉だ。

「僕は、手術をするのは医者でも、普段の生活で自分の健康をチェックする。『指示医』は自分だと思ってるからね」

初期のがんだつたため、おなかに複数の穴を開けて行う腹腔鏡下手術を受けることになつたが、なんと寺内さんは注射による脊髄麻酔を拒否したという。

「注射はイヤだ！」だったら手術は受けない、って言つてね（笑い）

すると、鼻から吸入するマスク麻酔に変更になつた。

「痛みだつて何だつて我慢する必要なんかないんだ。」

コンサート後、寺内タケンさんの楽屋には高校生がこう言つてお礼に訪れる。

74年から始まつた全国の

た盛田さんを、05年10月、再びけいれんが襲う。

「僕の場合、腫瘍が脳の静脈にくつづいているので、最初の手術でもとりきれて

いかなかつた。とうとうきたかなあとthoughtましたね」

昨年2月、2回目の摘出手術を受けた。髄膜腫はで

きるといくつもできること

が多い。今後、悪性に変わつたり、麻痺が進む可能性もある。

「でも生きていれば不自由でもなんとかなるからね」

「奇跡」と言われた復帰をなしとげたからこそ言える言葉だ。

「僕は、手術をするのは医者でも、普段の生活で自分の健康をチェックする。『指示医』は自分だと思ってるからね」

初期のがんだつたため、おなかに複数の穴を開けて行う腹腔鏡下手術を受けることになつたが、なんと寺内さんは注射による脊髄麻酔を拒否したという。

「注射はイヤだ！」だったら手術は受けない、って言つてね（笑い）

すると、鼻から吸入するマスク麻酔に変更になつた。

「痛みだつて何だつて我慢する必要なんかないんだ。」

コンサート後、寺内タケンさんの楽屋には高校生がこう言つてお礼に訪れる。

74年から始まつた全国の

た盛田さんを、05年10月、再びけいれんが襲う。

「僕の場合、腫瘍が脳の静脈にくつづいているので、最初の手術でもとりきれて

いかなかつた。とうとうきたかなあとthoughtましたね」

昨年2月、2回目の摘出手術を受けた。髄膜腫はで

きるといくつもできること

が多い。今後、悪性に変わつたり、麻痺が進む可能性もある。

「でも生きていれば不自由でもなんとかなるからね」

「奇跡」と言われた復帰をなしとげたからこそ言える言葉だ。

「僕は、手術をするのは医者でも、普段の生活で自分の健康をチェックする。『指示医』は自分だと思ってるからね」

初期のがんだつたため、おなかに複数の穴を開けて行う腹腔鏡下手術を受けることになつたが、なんと寺内さんは注射による脊髄麻酔を拒否したという。

「注射はイヤだ！」だったら手術は受けない、って言つてね（笑い）

すると、鼻から吸入するマスク麻酔に変更になつた。

「痛みだつて何だつて我慢する必要なんかないんだ。」

コンサート後、寺内タケンさんの楽屋には高校生がこう言つてお礼に訪れる。

74年から始まつた全国の

た盛田さんを、05年10月、再びけいれんが襲う。

「僕の場合、腫瘍が脳の静脈にくつづいているので、最初の手術でもとりきれて

いかなかつた。とうとうきたかなあとthoughtましたね」

昨年2月、2回目の摘出手術を受けた。髄膜腫はで

きるといくつもできること

が多い。今後、悪性に変わつたり、麻痺が進む可能性もある。

「でも生きていれば不自由でもなんとかなるからね」

「奇跡」と言われた復帰をなしとげたからこそ言える言葉だ。

「僕は、手術をするのは医者でも、普段の生活で自分の健康をチェックする。『指示医』は自分だと思ってるからね」

初期のがんだつたため、おなかに複数の穴を開けて行う腹腔鏡下手術を受けることになつたが、なんと寺内さんは注射による脊髄麻酔を拒否したという。

「注射はイヤだ！」だったら手術は受けない、って言つてね（笑い）

すると、鼻から吸入するマスク麻酔に変更になつた。

「痛みだつて何だつて我慢する必要なんかないんだ。」

コンサート後、寺内タケンさんの楽屋には高校生がこう言つてお礼に訪れる。

74年から始まつた全国の

た盛田さんを、05年10月、再びけいれんが襲う。

「僕の場合、腫瘍が脳の静脈にくつづいているので、最初の手術でもとりきれて

いかなかつた。とうとうきたかなあとthoughtましたね」

昨年2月、2回目の摘出手術を受けた。髄膜腫はで

きるといくつもできること

が多い。今後、悪性に変わつたり、麻痺が進む可能性もある。

「でも生きていれば不自由でもなんとかなるからね」

「奇跡」と言われた復帰をなしとげたからこそ言える言葉だ。

「僕は、手術をするのは医者でも、普段の生活で自分の健康をチェックする。『指示医』は自分だと思ってるからね」

初期のがんだつたため、おなかに複数の穴を開けて行う腹腔鏡下手術を受けることになつたが、なんと寺内さんは注射による脊髄麻酔を拒否したという。

「注射はイヤだ！」だったら手術は受けない、って言つてね（笑い）

すると、鼻から吸入するマスク麻酔に変更になつた。

「痛みだつて何だつて我慢する必要なんかないんだ。」

コンサート後、寺内タケンさんの楽屋には高校生がこう言つてお礼に訪れる。

74年から始まつた全国の

た盛田さんを、05年10月、再びけいれんが襲う。

「僕の場合、腫瘍が脳の静脈にくつづいているので、最初の手術でもとりきれて

いかなかつた。とうとうきたかなあとthoughtましたね」

昨年2月、2回目の摘出手術を受けた。髄膜腫はで

きるといくつもできること

が多い。今後、悪性に変わつたり、麻痺が進む可能性もある。

「でも生きていれば不自由でもなんとかなるからね」

「奇跡」と言われた復帰をなしとげたからこそ言える言葉だ。

「僕は、手術をするのは医者でも、普段の生活で自分の健康をチェックする。『指示医』は自分だと思ってるからね」

初期のがんだつたため、おなかに複数の穴を開けて行う腹腔鏡下手術を受けることになつたが、なんと寺内さんは注射による脊髄麻酔を拒否したという。

「注射はイヤだ！」だったら手術は受けない、って言つてね（笑い）

すると、鼻から吸入するマスク麻酔に

何だつて言つたほうが多い

と寺内さんは言う。

いくら信頼する医者でも、医者は医者の視点でしか、ものを見ていないのでから。

寺内さんが健康にこだわるのは、すべてギターのためだ。62年に「寺内タケシとブルージーンズ」を結成

以後、エレキギターの第一

人者として走り続けてきた。

「だって健康がきちっとしていないと、いいギターは弾けないでしょう」

健康法は、1ステージが終わると体重が1、2キロは落ちる、というパワフルなステージと、自宅に帰ると待っている愛犬2頭の散歩。「あとは疲れてよく眠ること」だという。

体重や体脂肪率も毎日測り、気をつけている。

そんな寺内さんも今年1月、心房細動という不整脈の一種を起こし、手術を受けた。

「まあ、これだけ気をつけっていても倒れるんですから。病気は早く見つければ治る。

でも、治らなければ死ぬしかない、ってことかな（笑）

「エレキの神様」は今も、ハイスクールコンサートを含め年間180回のコンサ

人間ドックは税金と思え

大橋巨泉（73）

「ツライ」と言う。

大橋巨泉さんは毎年、「税金だと思って」人間ドックを受けている。

05年、胃に異常を指摘され、さらに、内視鏡検査を受けたときの、

「念のため、細胞組織をとつておきましょう」

という医師の配慮によつて、胃がんが見つかった。がんが胃壁の中でもいちばん浅い粘膜層にとどまる早期がんだった。

1934年生まれ。著述業、タレント。05年、胃がんのため胃を半分切除する手術を受けた

「自分ではよく噛んでいるつもりなのに、そばで女房が『早い！もうのみ込んだでしょう。もっと噛んで』と何度も言う。『うるせえ』って返事している。ますが、リマインドさせてもらっているので体調を維持できる」と、夫人には感謝する。

1トのため、日本中を飛び回っている。程度まで食べられるようになりました。でも、あともう少し、例えば、すし1貫、そば一口が体調を崩すんです。胃を半分切除しましたが、容積は3分の1以下になつたように感じるね。すぐおなかが空くので、一日5秒で食べていたが、いまは3～4分かけて噛んでいる。

「自分ではよく噛んでいるつもりなのに、そばで女房が『早い！もうのみ込んだでしょう。もっと噛んで』と何度も言う。『うるせえ』って返事している。ですが、リマインドさせてもらっているので体調を維持できる」と、夫人には感謝する。

内視鏡を用いる方法でも切除できたが、内視鏡医も大橋さんも「転移の可能性を考へながら暮らすよりも」と意見が一致して胃の半分を切除した。が、その後の食生活は「想像以上に



に5回食べています」術後は朝昼晩の食事に2回の間食をはさんで、おやつ袋を持って歩いている。例えば、取材当日は2晩ホテル泊まりの予定があつたので、△ドーナツ△クッキー△羊羹△ヨーグルト△小魚の「焼きあご（とびうおの干物）」を小さな保冷袋に入っていた。毎回、夫人が用意するそうだ。

さらに、医師から「胃が半分になったので、歯で咀嚼してください」と言われた。術前は「焼きあご」を5秒で食べていたが、いまは3～4分かけて噛んでいる。

「繼續は力なり、で健康管理には長期間かかる。それなりの意志も必要です。両親が健康に産んでくれた体をキープするというのは、僕の哲学では義務だと考えています」

それでも私は温泉に入れない

俵 萌子 (76)

俵萌子さんは、乳房を切除して6年目のある日、群馬県・赤城山の俵萌子美術館で50代の女性からこんな質問を受けた。

「私は乳房を失ってから、どうしても温泉に入れません。俵さんはどうですか？」

女性は32歳で乳がんになつたという。俵さんが、「ねえ、もし7、8人おっぱいのない人がいたら、あなたも一緒に入れるの」と聞くと、女性は答えた。

「そうですね。私にも勇気が出るかもしれません」

ホームページで呼びかけたところ、全国の乳がん患者400人余りから「私も温泉に入りたい」というメールが届いた。驚いた俵さ

んは、半年後、伊香保温泉で「1・2の3で温泉に入る会」を開いた。全国から80人が集まり、久しぶりの温泉を心から楽しんだ。



1930年生まれ。評論家・作家。
陶芸家。96年に乳がんと診断され、
乳房を全摘する手術を受けた

刺青を入れていた。

俵さんは、

「天眼鏡で刺青を何遍も何遍もじっと見たの。すごいなあつて、脳天をかち割られるほどの感動を受けたんだや」と言う。

だが、そのときも俵さんは、だけは湯に入れなかつた。「私は今でも自分の体を鏡で見ると、笑いだしたいぐらい醜くて滑稽やと思う。」

される中で体をさらして傷つくなら、もういい。私にとって、温泉に入ることは大きな大きな壁でした」

そんなとき、一冊の本の表紙に目が釘付けになつた。米国の乳がん術後の女性が両腕を広げて海辺に立つて、傷跡に小さな葉を重ねて小枝に見立てた

「私は何の罪も犯していないし、女として卑下する理由はないはず。それなのに、手術後は男を好きになり恋をする勇気がなくなりました。女であれば、好きな男を見ればいいなと思う。されたい、一緒に寝たいと感じるもの。でも、もう男を愛する資格もなくなつた。当時の恋人は私のおっぱいを見て去つていきました。手術で命を救つてもらつたのです」

けど、私は女としての人生を失つたのです」

前立腺がんになった梶原拓さんは、手術を受けなかつた。

「そのまま何十年も生きていく人の気持ちを考えたことがありますか。どちらが残酷だと思

いますか。もちろん、乳がんの本当の苦しみは再発転移後、抗がん剤治療を受けながら生きていくことです。

でも、私がいちばん苦しかったのは、自分の体を醜いと思う、そういう自分に気づいたことでした」

それ以来、「美とは何か、醜とは何か」、考え続けた。「醜くても、人はそれを美しいと思えなければ生きていけない。そういうことを考えざるを得なくなつたら人生大きく変わります」

その試練を乗り越えたくて、俵さんはがん友達と温泉に入りました。私は今までおっぱいが二つある人と

「ベッドの中にいるやすらぎを感じました。私は今でもおっぱいが二つある人は温泉に入れません」

泉に入り、おっぱいをなで合つて、「大丈夫、大丈夫」と励まし合つた。

「ベッドの中にいるやすらぎを感じました。私は今でもおっぱいが二つある人は温泉に入れません」

天皇陛下が命の恩人

梶原 拓 (74)

腺がんであることがわかつた。

03年1月のことだ。

県立病院の主治医は、す

ぐに腹部を開いてがんを切り取る外科手術を勧めた。しかし梶原さんは即断しなかつた。まず、診断を受けた足で記者クラブに行き、血液検査で腫瘍マーカーを調べたところ、初期の前立

佛教に、ドキドキする。

朝日ビジュアルシリーズ

仏教新発見

■定価580円(税込) ■毎週木曜日発売

23号 西大寺

新発見◎巨大寺院を衰退から救った「釈迦にかえれ」の教え

朝日新聞社

がん患者の心のケア コメディカルにも相談しよう

近年、がんになつても、治療後に生還できる人が増えてきた。がん検診や診断の精度が上がりつたり、進行がんと診断されても、がんのできた臓器によるばらつきはあるが、全般的な治療成績が向上したりしているからだ。

そんなまでも、がんと診断されたときのショックは大きい。さらに、治療によつて心身にダメージを受ける。「心と体のつらさを相談できるところがない」と、多くの患者が私にそう語る。だが、実は病院には医師以外にも数多くの専門家が働いていて、声をかけられ、相談に乗ってくれる。例えば、がん闘病にまつわる日常生活や会社・学校などの社会生活に関する悩みはソーシャルワーカーへ。治療選びや主治医に関しての相談は専門看護師へ。術後の原麻希

リハビリについては作業療法士や理学療法士へ……。

これらの専門家は「コメディカル」と呼ばれ、大学病院の場合は10~20種類の人

がいる。

この数年、米国を手本に日本のがん治療現場に導入されている「チーム医療」でも、コメディカルは大きな役割を果たしている。

本文中のインタビューでも、仁科亜季子さんは「看護師さんから『つらいよね。でも、だいじょうぶだよ』があつたら、言つてね」と声をかけられて、とても心が解放されました」と話していた(38頁)。

重粒子線治療などいくつかある選択肢のなかで、最終的に梶原さんが選んだのは、重粒子線治療という治療法だつた。

「県立病院の泌尿器科の外科医がメスを持って待つてたんだけどね」と笑う。

重粒子線治療とは、炭素の原子核を加速し、がん細胞に打ち込むという新しい治療法だ。メスを使わず、X線よりも患部に確実にあり、副作用も小さい。しかし、全国でその治療を受けられる施設は限られていた。が、退院当日、ようや

同時に友人、知人から情報収集を始めた。

「私はね、理想の医療とは必ず治る②早く治る③痛くない④お金がかからない、この四つだと思っているんです」

重粒子線治療はこの条件にいちばんかなつていたと

いう。

千葉県の放射線医学総合研究所に入院し、4週間治療を受けた。

「痛みもないし、何もすることができないので(笑い)、同じ患者仲間と散歩をしたり、食堂で話したりしてました」

「僕が受けた治療法は主治医からの説明だけでは絶対に知り得なかつたわけで

たりしている」という。

1933年生まれ。元岐阜県知事。03年、前立腺がんと診断され、重粒子線治療を受ける。



岸本葉子(46) 不安とつきあう「心の基礎体力」

岸本葉子さんは、40歳のとき虫垂がんと診断され、虫垂と大腸の一部を切除した。入院中は検査、手術、リハビリなどいろいろあつた。が、退院当日、ようやく自宅に戻り、居心地のいいはずのソファに座った瞬間、再発の不安、何かをしなければという焦燥感、そして無力感が押し寄せてきたことを思い出す。

「手術で完治する確率は3割(後日、主治医が5割と



言い直した」と言わされていました。つまり、いま病院でできることは全部していただいたにもかかわらず、ただいたにもかかわらず、残り7割は再発の可能性がある。「もしかしたら、私は死ぬのか」と思い始めたら、居ても立ってもいられず、

岸本さんはありとあらゆる情報を集めた。その結果、再発を防ぐ方法はないとわかれ、今度は不安とどう付き合っていくか、模索した。

1年目は心理療法や哲学、さらに、古今東西の死と直面した人物の思想に関する書物を読み込んだ。のちにこの経験が「精神的な支えの蓄積として心の基礎体力になつた」と振り返る。

2年目はサポートグループに入り、患者同士が語らう時間を作った。最初

は「同病相哀れむ、にはなりたくない」という先入観があった。が、実際には、自分にとつて特別だったが自分体験を日常的なできごとに話せることに心が解放された。再発の不安は自分一人で抱えて生きていくしかない。でも、同じ悩みを持つ人がたくさんいることもわかり、安心した。

「だれ一人として不安を消すことができた人はいないんです。でも、それぞれの方法で自分をコントロールしていくので、不安を強く覚えるタイプです。でも、動搖することなく、何食わぬ顔をして仕事を続けていたので、大きな不安と共に存しているように見えなかつたでしょう。意識的に半年後のことを考えず、いまその後のことを集中する思考や行動様式を取りました」

術後5年目の昨年、同世代のがん体験者と知り合い、「希望を育むようなイベントをしよう」という気持ちがあつた。が、実際には、自分にとつて特別だったが自分体験を日常的なできごとに話せることに心が解放された。再発の不安は自分一人で抱えて生きていくしかない。でも、同じ悩みを持つ人がたくさんいることもわかり、安心した。

「私は自分であれこれ考えていたので、不安を強く覚えるタイプです。でも、動搖することなく、何食わぬ顔をして仕事を続けていたので、大きな不安と共に存しているように見えなかつたでしょう。意識的に半年後のことを考えず、いまその後のことを集中する思考や行動様式を取りました」

文/丹川 鹿司 デザイン/大坂 智(PAIGE)
企画・制作/週刊朝日 AD セクション

FIFA Club World Cup Japan 2007
presented by
TOYOTA



TOYOTA
PRESENTING PARTNER

© 2004 FIFA TM

TOYOTA プレゼンツ FIFA クラブワールドカップ ジャパン 2007 観戦チケットプレゼント

世界中のサッカーチームが頂点を目指す「TOYOTA プレゼンツ FIFA クラブワールドカップジャパン 2007」。トヨタ自動車がオフィシャルプレゼンティングパートナーとして協賛するこの大会に、今年から新たな局面が加わる。昨年まではアジア、アフリカ、北中米カリブ海、南米、オセアニア、ヨーロッパの6大陸のクラブチャンピオンが熱戦を繰り広げてきたが、今年からJリーグチームが参加し、名実ともに真の世界王者を目指す試合が展開される。そこでトヨタ自動車は「世界中のサッカーファンに夢と感動を」をキーワードに、12月12日(水)東京・国立競技場(19:30 キックオフ)で実施される準決勝に『週刊朝日』読者10組20名様をご招待。

応募方法:はがきに住所、氏名、年齢を明記の上、〒104-8011 朝日新聞社
出版広告部「TCチケットプレゼント係」まで
応募締め切り:11月30日(金)必着
当選:賞品の発送をもって代えさせていただきます。

注)応募ハガキの内容は、機械的に集計し、具体的な個人名などが流出することはございません。また、お預かりしたお客様の個人情報は、プレゼントの抽選・発送のために利用させていただき、当該業務委託に必要な範囲で委託する場合を除いて、お客様の承諾なしに第三者に開示・提供することは致しません。

4度の手術も「悩まない」

大空眞弓(67)

大空眞弓さんはこれまでに4度、がんの手術を受けている。

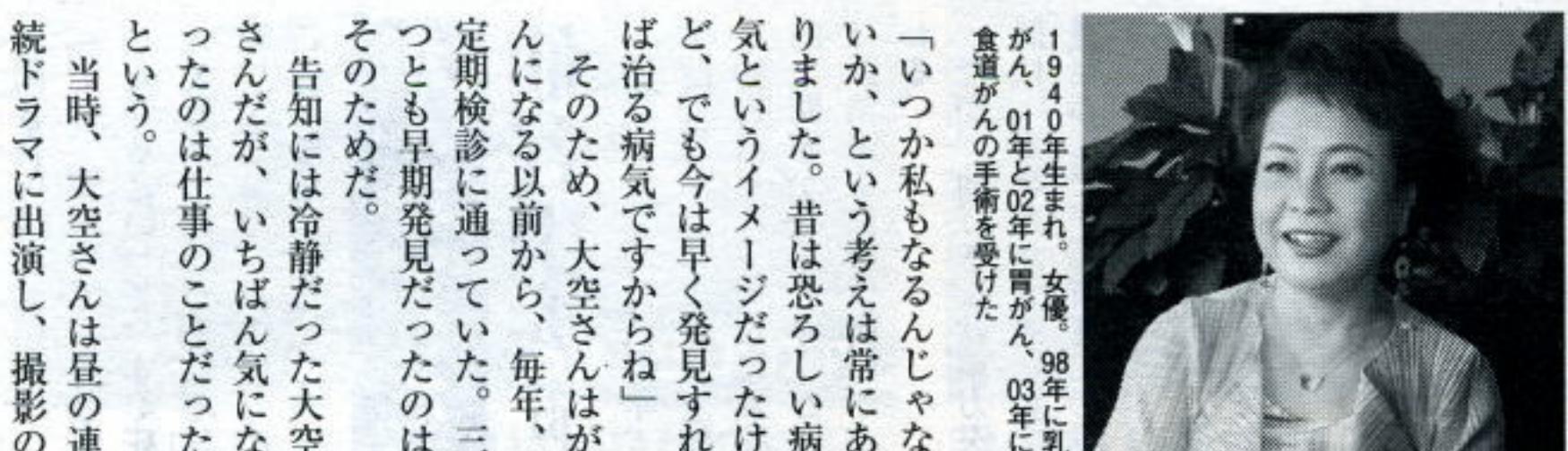
98年に乳がんを、01年と02年には胃がん、03年には食道がんになった。乳がんからの転移ではなく、それが原発性のがんである「多重がん」だ。

しかし大空さんは、「まあ、なつてしまつたものは、なぜ私なの?」なんて悩んでもしようがないですから」とサバサバした口調で話す。

「それに何万人に一人といふ病気じゃない。がんになるのは私だけじゃないですからねえ」

大空さんが冷静でいるのは理由がある。

姉・朋枝さんは胃がんと29歳のとき亡くなっている。母も肝臓がんで亡くなり、父も胃がんを経験している。



真っ最中だった。

「役者はいつたん仕事を引き受けると、降板することはできないんです。スタッフや楽しみにしてくださつてのお客さま、多くの方にご迷惑をかけますから」

乳房を温存すると、その後も放射線治療などの補助療法が必要になる。

「今さら水着になる仕事も来ませんから」と、もつとも入院時間が短くて済む全摘出を希望、乳房の再建手

術も断つた。結局、10日間の入院だけで撮影に復帰しました。昔は恐ろしい病気というイメージだったけど、でも今は早く発見すれば治る病気ですかね」

そのため、大空さんはがんになる以前から、毎年、定期検診に通っていた。三つとも早期発見だったのはそのためだ。

「私は、大切なのは『明日じゃなくて今日』と思つてゐるんです」

だから仕事や、好きな友人とご飯を食べること、楽しいことを思い切りやるのだという。今は「飽きちゃった」と言うが、昨年から

大切だけど、いつがんになるかなんて誰にもわからな

いま思う「がんは良い病気」

逸見晴恵(58)

夫が胃がんで亡くなり、残ったのは12億円もの大借金。それからまもなく発覚した自身の子宮頸がん。

「立て続けにあまりにもいろいろなことがあって、泣いていたりする暇もなかつた」

93年に胃がんで亡くなつたアナウンサー逸見政孝さんの妻、晴恵さんは当時をそう回想する。

93年、胃がんのため亡くなつたアナウンサー逸見政孝さんの妻。94年に子宮頸がんの手術を受けた

夫の死から1年後の94年、人間ドックで初期の子宮頸がんであることがわかつた。あまりのショックに、「わたしもがんで死ぬのか!」

とパニックになつたが、冷静になると、「死んでたまるか!」

という気持ちに変わつた。ごく初期だったため、医師は「手術をすれば大丈夫でしょう」と説明したが、目に政孝さんの姿が浮かんだ。

「逸見は『専門外のことは専門の人におかせておけばいいんだ』と一人のお医者さんを信じて手術を受けました。でも、そうではなかつた」

最後となつた3回目の手術では、約3キロもの臓器を切除した。

いんだから、ビクビクして



「とつた臓器を見せられたときは、こんなにとつても

人は生きていけるのか、と
背筋が寒くなりました

同じテツはふむまい。

まず専門の良い医師を探さなければ、と知り合いに婦人科の医師を紹介してもらった。さらに、その医師にも紹介状を書いてもらい、セカンドオピニオンを求めた。

「結局受けませんでしたが、もう一人、サードオピニオンも受けようと思っていたんですよ」

さらに、病院の売店で医学書を読み、手術法も確認した。

「やっぱり自分が納得しないとダメなんですね」

今は治療法も手術だけでなく、放射線治療や抗がん剤治療などさまざまな選択肢がある。

「逸見が手術をした当時は

悪いところはごつそりとする、という傾向があった。今だったらとらないでおく、という選択もできたはず」

晴恵さんは現在、がんに関する講演や活動を行い、形は変わったが、今もがん

と向き合い続けている。

「でも、がんって、見つかってからといって、すぐ死んでしまうという病気ではないでしょ。身の回りのことを整理できる。この家

んでしまって、身の回りのことを整理できる。この家

はお父さんと一緒につくった家なんだから絶対売らないで』って子供にも言い残しておける（笑い）

晴恵さんのなかで、がんは「良い病気」に変わった。

がんがくれた「違う人生」

仙谷由人(61)

仙谷由人さんは、02年、

本誌で胃がんによる胃全摘を初告白した。健康に致死的な問題があるということは政治家生命の信用にかかる。

だが、仙谷さんは執刀医師に「あなたが元気な姿を見せることが患者さんの励みになる。隠したりせず公表したほうがいいよ」と勧められ、政治家として決意したという。

仙谷さんが手術前の検査を受けた日、今井さんは築地中央市場の「鮨文」というすし屋に連れていくてくれたそうだ。店の名物の穴子をパクつきながら、「胃がんとは」「入院生活とは」などの患者学を何気なく伝授してくれたという。

「今井さんは、僕の手術にも立ち会ってくれました。退院後は一緒に、日本のがん医療を変えるため行動していたのですが、すでに今井さんのがんは転移していて志半ばで亡くなつた。僕の中には、そのときの思い入れもあります」

争時の学生側の現場リーダーとして名前が知られた人物で、のちに諏訪中央病院の医師となつたころは鎌田道府県が本腰入れて取り組むために、予算を1桁多くつぎこんで話をしようよ。医療費がつかなければ、市民が運動を起こしてムーブメントを起こそう。家族も友達もがんになる時代です。

市民が動けば、県議会も市議会も本気で取り組まざるをえないからです」

今井氏は、かつて東大紛糾委員会も本気で取り組まざる

はお父さんと一緒につくったのは、東京地裁で開かれた東大闘争による東京拘置所勾留理由開示裁判でした。当時、僕は弁護側という関係だった。その後、同じ国會議員として再会し、さらに、がんになつたときには、がん患者としての所作のアドバイスを受けました

仙谷さんが手術前の検査を受けた日、今井さんは築地中央市場の「鮨文」というすし屋に連れていくてくれたそうだ。店の名物の穴子をパクつきながら、「胃がんとは」「入院生活とは」などの患者学を何気なく伝授してくれたという。

「今井さんは、僕の手術にも立ち会つてくれました。退院後は一緒に、日本のがん医療を変えるため行動していたのですが、すでに今井さんのがんは転移していて志半ばで亡くなつた。僕の中には、そのときの思い入れもあります」

がんになるまで、仙谷さんは民主党の金融財政の専門家だった。が、この人生

はお父さんと一緒につくったのは、東京地裁で開かれた東大闘争による東京拘置所勾留理由開示裁判でした。当時、僕は弁護側という関係だった。その後、同じ国議員として再会し、さらにはNPO法人ががんに関する講習会を重ねて、必死でがん検診対策に取り組むが、受診率にそれが表れない。

「徳島県だけではなく、都道府県が本腰入れて取り組むために、予算を1桁多くつぎこんで話をしようよ。医療費がつかなければ、市民が運動を起こしてムーブメントを起こそう。家族も友達もがんになる時代です。市民が動けば、県議会も市議会も本気で取り組まざる

のイベントを境に、医療問題に関する活動が増える。がん患者団体と抗がん剤の早期認定を要請したり、医療制度改革や医療費についての質問に立つたり。「がんにならなかつたら違う人生だった」と言いきる。

事務所にかかる電話の陳情の3分の1は、がんに関する内容だという。「患者が悩みを相談できるサロンをつくってほしい」「治療法を保険適用にしてほしい」など……。徳島県内ではNPO法人ががんに関する講習会を重ねて、必死でがん検診対策に取り組むが、受診率にそれが表れない。